

R&V

1993年
冬号 1月～3月
第8号

山を想いて

ゴールデンウィーク、家にいるとやたら目につくのが山の遭難記事である。今年の春山の中で最も悲劇的な事故は、月山での新潟県の学生の遭難ではないだろうか。同じ山でビバークした茨城のパーティは、軽い凍傷ですんでいるのに学生4人は全員凍死してしまった。五月の山は天気ぐずれると冬山に逆戻りしてしまう。まさに冬と春が同居しているのである。

一方のパーティーが助かり一方のパーティーが死亡と明暗を分けているが、この差は一言で言えば山の経験の差で生と死に分かれたのではないだろうか。今年の二月、広島山の会の高見さんが大山で遭難したことはまだ記憶に新しいと思う。厳冬期の大山で一人、三日も帰って来なければだれもがもうだめだと思っていたと思う。それが生きていたのである。自力で下山したというニュースを聞いたとき「さすが高見さんだな」と敬服させられたのである。

うちの会も今、山に行っているがまったく心配することはない。会のメンバーは何しろ信頼がおけるからである。この文の会報が出るころには一緒に山行文も掲載されている事と思うが？

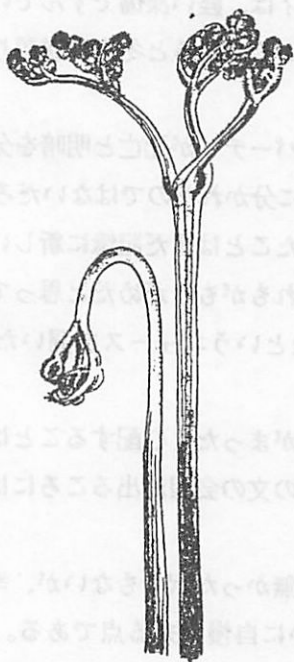
これまで当会もまったく遭難が無かった訳でもないが、幸いにも会からは一人の死者も出していない。これはおおいに自慢出来る点である。ゴールデンウィークも過ぎ、山が新緑に覆われ夏山本番が近くなって来るが、ここで会の皆さんに一言。登山は山行の計画をたてている時からすでに始まっていると思います。ただ人の後をついて登るのではなく自分で登る山のプランをたて、そしてそれを実行して成功した時の喜びは、ただ先輩の後をついて登った時よりも数倍も感激出来ると思う。

ガイドブック、ルート図、地図等眺めていると、時のたつのも忘れてしまう。私も若いころ、いつかはヒマラヤと思っていたのだが、時が過ぎ去るのはあまりにも早い

ものである。

会も最近、若い人が多くなってきているが、より高く困難な山へと自分自身でプランをたて目標をもって、先輩たちを乗り越えていってほしいと願うばかりである。

(中島淳)



目次

吉野会報

1993年 冬号 1月～3月 第8号 ACC-J茨城

山を想いて	・・・ 1
集会報告	・・・ 4
山行報告	・・・ 5
ザ・アルペンクライマー鹿島槍天狗尾根 (正しい冬期登攀のありかた)	・・・ 6
冬合宿 鹿島槍東尾根	・・・ 10
鹿島槍赤岩尾根	・・・ 14
正月合宿一鹿島槍ヶ岳	・・・ 20
松木沢氷壁訓練	・・・ 21
茨城岳連冬山講習会 一山スキー講習一	・・・ 22
県岳連冬山講習会	・・・ 23
八ヶ岳赤岳主稜	・・・ 24
八ヶ岳赤岳登頂	・・・ 25
八ヶ岳横岳西壁中山尾根	・・・ 26
硫黄岳～横岳縦走	・・・ 28
八ヶ岳阿弥陀岳北西稜登攀	・・・ 29
阿弥陀岳北稜	・・・ 32
上州武尊山 山スキー	・・・ 33
荒沢山～足拍子山縦走	・・・ 34
友好山岳団体の月報、会報紹介	・・・ 38
編集後記	・・・ 39

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

目 次

1月 6日

出席者 本図、高田、中居、佐藤、所、生井

1月20日

出席者 本図、鯉河、菊地、古山、中居、佐藤、馬淵、生井、高田、原田

2月 3日

出席者 鯉河、菊地、佐藤、中居、高田、本図、古山、所、馬淵、村上
高木、生井

2月17日

出席者 中居、高田、菊地、本図、古山、鈴木、笹沢、馬淵

3月 3日

出席者 鯉河、中島、高田、本図、菊地、庄司、村上、広瀬、古山

3月17日

出席者 佐藤、高田、本図、菊地、古山、中居、木村

3月31日

出席者 鯉河、中島、古山、中居、菊地、高田、本図、佐藤

山行報告

12月30日～1月3日 正月合宿（鹿島槍ヶ岳集中）

①天狗尾根 L生井、中居、名雪

②東尾根 L高田、所、佐藤

③赤岩尾根 L本図、古山、村上

馬淵、庄司

1月17日 古河人口壁フリークライミング 生井、佐藤

1月31日 松木沢アイスクライミング L鯉河、生井、中居

本図、笹沢、庄司

古山

2月6～7日 あだたら冬山講習会 古山、馬淵

〃 八ヶ岳小同心クラック（敗） L生井、中居、佐藤

2月11～14日 八ヶ岳西面

(11日) ①赤岳主稜 L佐藤、中居

②赤岳文三郎ピストン L高田、馬淵

(12日) ①中山尾根 L佐藤、中居

②硫黄～横岳 L高田、馬淵

(13日) 阿弥陀岳北西稜 L高田、佐藤、中居

2月13～14日 八ヶ岳阿弥陀北稜 L菊地、鈴木

2月21日 上州武尊山山スキー L高田、本図、古山

中居

3月21日 谷川岳東尾根（敗） L生井、古山、庄司

3月28日 荒沢山～足拍子山縦走 L生井、本図、古山

中居、庄司

ザ・アルペンクライマー 鹿島槍天狗尾根 (正しい冬期登攀のあり方)

1992. 12. 30 ~ 1993. 1. 3

パーティ L 生井一男、中居康展、名雪博二

1992年の暮れは穏やかな天気が続き、後立山方面は積雪量は例年に比べて少ない方であった。松本駅で山仲間の乗って来た高グレードのランクルに拾われて、鹿島部落を通り越し、車の入れるぎりぎりの所まで雪路を入った。

夜明けを待って出発、冷沢の橋で東尾根パーティと無事を誓い合い、新年の鹿島の稜線での再会を約し別れた。それからは我々天狗尾根パーティの3名のみとなった。大川沢左岸の踏跡を辿る。荒沢出合で先行パーティがルートをはずし東尾根に向かっているのを踏跡だけで見抜いてしまう(素晴らしいルートファインディングが身につけているのである)。急な登りが続く。関東地方、いや日本の中でも今回の天狗尾根パーティは優秀なクライマーが多い中、特に選びぬかれたメンバーである。重いザックもものともせず、次第に深くなる雪のラッセルはまさに余裕を感じさせる(バテた奴はいない気がする)。厳冬の吹き付ける吹雪にも微笑さうかべ山を心から楽しむ体であった。午後には雪、一晩で50cm、テントはビタビタ無茶苦茶に濡れる。

翌朝は他のパーティの出発を確認しゆっくりと出発。第1クロアールの手前で先行のドタバタを見、キジをうった後これを電光石火のごとく、あっという間にぬける。続く第2クロアールの急斜面だ。他のパーティに遠慮してもらい我々の技と力を見せつけることになってしまう。ここを抜けると急に強風となり地吹雪に視界を奪われ、息もできない緊急事態となるが、知恵と技術と体力に恵まれたスーパーパーティである我々は、直ちに雪洞建設に取り掛かり、素晴らしい雪洞を作ってしまう。雪洞の中のまぶしいほどのローソクの明かり、豊富な食糧とつまみ、高級な酒に心地よい疲労がひろがる雪洞はあたたかい。冬山の醍醐味の中に今我々がいるのであろう。

天狗尾根は1993年の元日を迎えたが、相変わらず風は強く、横なぐりの風に体はゆれ、地吹雪に視界を奪われる。我々が向かう天狗の鼻からは、この強風に耐え切れず数日前に入山した者も、テントをたたんでほうほうの体で逃げ出し我々の横をすり抜け、続々と下山していく始末である。他のクライマーのうろたえる様を見ても一歩一歩確かな足取りで進む様はまさにザ・アルパインクライマーの名にふさわしい雄々し

さである。この風にも負けず10数人をゴボウ抜きにし、天狗尾根の核心部である小舎岩上の岩場に本日2パーティ目に到着した。あとで判ったがこの日この核心を抜けて荒沢の頭に出られたのは3パーティだけだった。

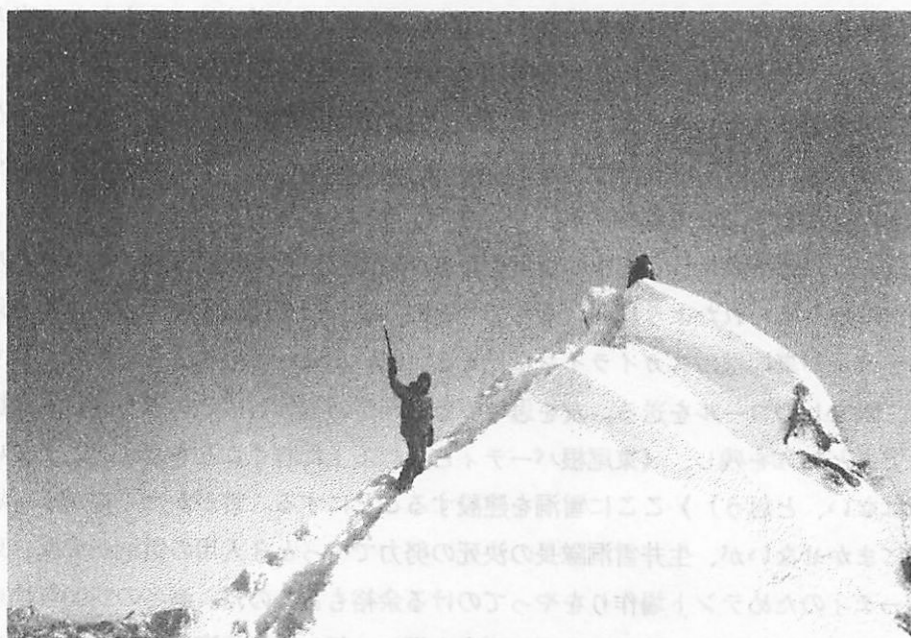
先行パーティは我々が着いたときやっと登攀の支度をして取り付くところだった。しかしいつまで待っても進まず二回取り付きに落ちる始末である。ここで我々が先行パーティのザックを体からはずしてあげる。また、ルート of 指示をしてあげる。空身になったためなんとか取り付くものの遅々として進まない。1時間もたった頃、ザイルをフィックスしてトップが下降し再びプルージックで上る。かなりきわどい登攀に感じられる。セカンドがヒーヒー言いながら登っていく。このころになると長い間強風の中待たされ続け、いらいらしてくる。もう我々の後には15人以上が待っている。

そして、やっと我々の番がきた。トップパーティがやったように空身で登り下降し再び登り返す方法でしか登れないのだろうか。そうするといよいよ夕闇もせまり今日中に抜けるのが無理かもしれない、との考えがつのってきた。そこで当会が世界に誇る生井リーダーの登場となる。なんと彼は先行が2回も落ちた取り付き部をあっという間に重い荷を背負ったまま難無く乗り越したのだ。慎重に行くよう思わず声をかけてしまった。すると「人に登れたところを俺に登れねーはずはねーべよ」と大声の返事が返ってきた。順番待ちのクライマー全員がじっと息をこらして見守っている。この声に全員が「オー」と感嘆の声をあげた。尚も登攀は続き、少したってコールがあり、セカンドも一速く取り付く。ガンのピッチ35mをノーピンで登っている。続く被り気味の壁も雪を落とし難無く登ってしまう。

後は荒沢の頭へ向かう一直線の雪稜を登る。左側は荒沢奥壁から続くクロアールへと一気に削り取られたように切れ落ちて、その向こうに東尾根が見える。この時東尾根パーティが東尾根のスカイラインに見える。だいぶよれている様子だ。我々はさすが、励ましのコールを送る。友を思いやる心が伝わる。しばし休憩の後、鹿島槍北峰まであと50mを残し、《東尾根パーティと共に頂上に着くことを考え（バテていたのではない、と思う）》ここに雪洞を建設することにする。雪がかたくなかなか思うようにまかせないが、生井雪洞隊長の決死の努力でやっと3人用の雪洞が完成、東尾根パーティのためテント場作りをやったのける余裕もあるのだ。厳冬の2800m地点の城塞では東尾根パーティの無事生還と再会を祝い、新しい年を迎えためでたさも雪洞の中の宴はいつはてるともなく続くのだった。



北峰直下の雪洞にて



北峰直下にて

翌日、朝日の中で鹿島槍の頂上に全員無事登頂する。友情の固い握手は涙にぬれ、考えは次の大登攀を思い描く。冷池小屋で迎えるシェルパに出会うが、我々は少しの疲労感を感じることなく、本図隊長の心配をよそに隊長の待つ赤岩尾根下降点まで、軽い足どりで元気に到着したのでありました。我々パーティは本日付をもって『なーさんチーム』と呼ぶ。生井、中居、名雪だからである。キャバレーで呼ばれているからじゃない。かっこいい“なーさん”だからである。今後も茨城の皆さんには引き続きお世話になります。素晴らしい山行をありがとう。

(東京のなーさん 記)



鹿島槍ヶ岳頂上（南峰）

名雪 中居 生井

冬合宿 鹿島槍 東尾根

1992. 12. 30 ~ 1993. 1. 3

パーティ L 高田暢年、所繁、佐藤文則

今年の冬合宿はかなり盛大なものである。というのも、天狗尾根隊：名雪、生井、中居。赤岩尾根隊：本図、古山、庄司、村上、馬淵。そして、我々が東尾根隊には、高田、所というベテラン、大ベテランがいて、佐藤というお荷物を十分引っ張りあげてくれる。（後に、本当の大荷物になってしまったのだが）どの隊も十分すぎるメンバーではないか。みんなそれぞれのルートを登るのに意欲をもち、そして実力もあると思われる。この合宿が過去の栄光となることなく、発展の礎となり山行がどんどんレベルアップして行くことを僕は望みます。

それはさておき、12月29日、例年よりも1日早い夜、我々は天狗尾根隊とともに下館に集合し、松本目指し出発。30日早朝名雪さんと落ち合い、今度は大谷原を目指す。大谷原に予定よりも早くついたので少し仮眠を取る。

ここだけの話だけど、圧雪しなくては等とってもらいたい事を言っていましたが、大谷原でランクルをいったりきたりさせてたT氏は楽しそうでした。

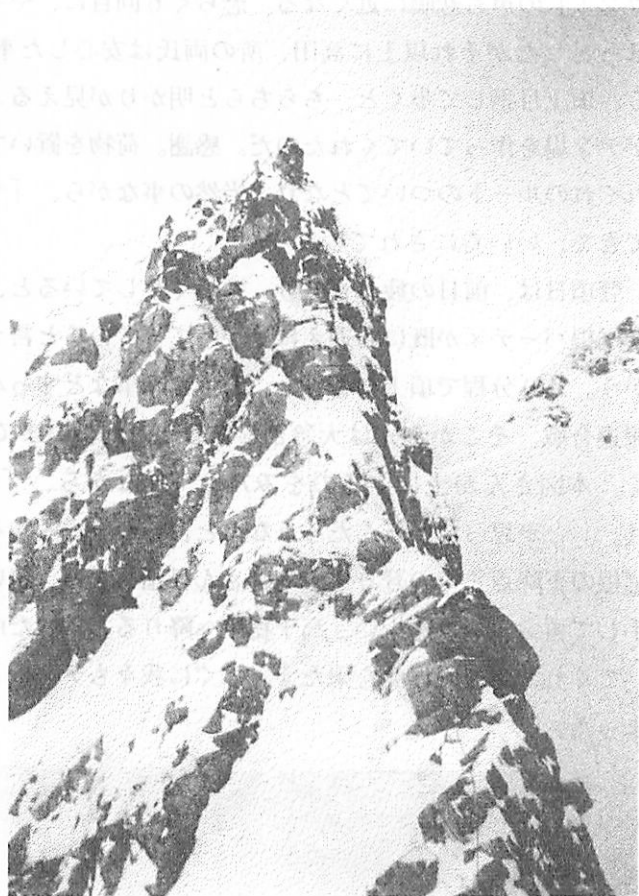
さてさて、目を覚ました我々は軽く朝食を取り、大冷沢にかかる橋まで皆で一緒に歩き、渡った所で、頂上での再会を約束して、天狗尾根隊と別れる。

大冷沢を20分も詰めたころ、取っ付きの目印である古びたスパッツを見つけ、一休みした後一気に高度を稼ぐ。あまりの急登に思わず手を使いながら200メートル近く登った後は、やや急な尾根を登る。傾斜が少し落ちたころ一ノ沢の頭に着く。ここら辺まではトレールがあり楽である。雪洞があったので、ここでのキャンプを予定して、所と佐藤は偵察に行き、高田は雪洞を整備する。偵察は小ピークを3つ目位まで行くが適当なビバーク地は見当たらず雪洞へ戻る。雪洞を広くしているうちに天井に穴を開けてしまい、ツェルトビバークにする。とは言え、半分は雪洞のなかのような感じで十分暖かい。

一夜明けると、しんしんと雪が降り、トレールは消え、視界も利かない状態である。2177メートルのピークを目標に出発する。胸近くのラッセルに手間取り、なかなか前に進まない。前日15分ほどで着いた小ピークまで1時間近くかかり、目標のピークには4時間半もかかって着く。ここでも雪洞を試みるがどうしても十分なも

のが掘れない。それでも、歪ながらも掘れたので中に入る。風が入ってこず、快適である。もう外には出たくないと思いながらお茶を飲み、飯の用意をしていると、全く無音のまま屋根が落ちてきた。幸いにも貴重な豚汁には雪は入らず、無事であった。高田さんの冷静沈着な行動の賜物である。この事件は、天狗尾根パーティを脅すのには十分なものであった。

一夜明けると、今度は超が付くくらいいい天気である。初めて見る山からの初日の出を拝み、無事の登頂を祈って出発。すごい勢いの先行パーティを追い、第一岩峰に取り付く。基部の



第2岩峰を登る

ちょっとした露岩を越えた雪壁状の途中で、先行が引き返す決定をし、我々は、先へと進む。強力なラッセルをする先行パーティを失い、我々のスピードはがぐんと落ちる。雪崩のおきそうないやらしい斜面を慎重にラッセルし、第二岩峰に着く。この直前のコルの手前で天狗尾根パーティと無線交信した。向こうはどうやら核心部を抜けたらしく遥か上の方に見える。さあ取り付きだ。下部を所さんがトップで行く。リッジのような感じだ。上部は高田さんが空身で行く。高田さんのザックを伴う所さんが苦労しながらも乗っ越す。後は、佐藤だけである。落ち着きを意識しながら最初のいやらしい部分を抜け核心部につく。ザイルがかかるランナーを回収しながら後一手で乗っ越す、という所まで行き、手が詰まって一旦落ちる。これがいけなかった。最初は余力を残して落ちたが、だんだん力がなくなり完全に滑落し始めた。「ザイル、ダ

ウン！」の声も悲鳴に近くなる。恐らく6回目に、やっとの思いで通過した。佐藤もほっとしたがそれ以上に高田、所の両氏は安心した事だろう。よれよれになりながら、頂上目指して歩くと、ちらちらと明かりが見える。先に着いた天狗尾根パーティがテン場を作ってくれたのだ。感謝。荷物を置いて雪洞で乾杯。話題は自然とそれぞれのルートについてとなり、当然の事ながら、「ザイル、ダウン！」の悲鳴が出てきて、いい肴にされてしまった。

登頂日は、前日の疲れもあり、ゆっくりしていると、前日鹿島槍登頂を果たした赤岩尾根パーティが既にお迎えに上がってきていると言う。大慌てで準備をし頂上へ向かう。20分程で頂上に着くと、お迎えの事などすっかり忘れ、しばし感動。そして報道合戦。そこから先は大急ぎである。冷池小屋まで一息でくると、さすがに苦しく、本図さんが上にいるのをみんなで見ながら、「早く来いってんだ、この野郎共。」とか思っているんだろうなどと言いつつ一服する。さあ、後一踏ん張り、赤岩尾根の下降点までの登りを、本図さん目指し登る。着いた所で本図さんを始め皆と握手して再会、無事を祝い、高千穂平へ降りる。着いた所には他のメンバーが出迎えてくれ、全員の再会を果たす。すぐに我々もテント・ツエルトを張り、大宴会が始まった。



鹿島槍北峰にて 高田、佐藤、中居
所 名雪

いつもならこれでお仕舞いになるのだが、今回はまだおまけがある。宴会の翌日、赤岩尾根を下降した我々の前には沢が横たわっていた。誰が落ちるかである。まず、本図さんが飛ぶ、ぎりぎりのところで、セーフ。それを見て、賢明なつもりの佐藤は、石伝いに行く。ツルッと滑って、まずドボン。何人か無事通過の後落ちたのは、中居さんである。そして、最後に残った村上さんは、色々と策を講じながらも期待通りにはまってくれた。後は林道をひたすら下る。

今回は、まだ終わらないのだ。薬師の湯で汗を流した後、所謂、一つの、例のソバ屋で祝賀会。もうみんなでベロンベロン。その後信濃大町の駅で、胴上げ、万歳をして今回の山行は終わったのである。

12月29日 下館 22:00 -

12月30日 松本 2:30~4:00 - 大谷原 4:30 (仮眠) 8:00 - 東尾根取り付け 8:40 -
一ノ沢の頭 12:20

12月31日 発 8:00 - 二の沢の頭 12:20

1月 1日 発 7:00 - 第一岩峰の直下の岩場 8:00 - 第二岩峰取り付け 14:00 -
第二岩峰上 16:35 - 鹿島槍北峰肩 17:50

1月 2日 発 9:30 - 鹿島槍北峰 9:50 - 鹿島槍南峰 10:25 - 高千穂平 12:30頃 -
宴会 -

1月 3日 発 7:00 - 西俣出合い 8:05 - 車 9:00 - 宴会 - 下館 21:50

(佐藤 記)



カワラナデシコ

鹿島槍赤岩尾根

1992.12.30～1993.1.3

パーティ L 本図一統、村上晴美、古山正文、馬淵勝則、庄司真陸

12月30日22時下館集合。東、天狗尾根隊はすでに前夜出発しているので集まったのは赤岩尾根パーティの本図隊長、古山・村上さん、馬淵くん、それに私の総勢5名である。本図さんの道路情報により土浦にとってかえし、常磐・中央道でいくこととなった。

鹿島槍は前から登りたいと思っていた。「鹿島」という名に親しみがもてる上に、なんいっても切れのある双児峰がかっこいい。私がいくのは一般ルートだがはじめての山でもあり、冬山の経験の浅さからくる不安と期待が半々といったところか。

古山さんが双葉S. A. まで、そこから私が運転し途中大きな渋滞もなく4時前に大谷原到着。ほどなく無線で元気いっぱい東尾根隊とも確認がとれた。

仮眠後出発。雪もちらちら舞っているがおもっていたほど寒くはない。今日は標高2kmの高千穂平までひたすら登りが続く。とくに西俣の出合からは斜度も急激に増し今回の山行を通じてもっとも苦しいところになるだろう。西俣までは雪に埋もれた車道をだらだら歩く。荷は重いはまだ歩きはじめなのでこたえてこない。順調に2時間ほどで西俣に着く。さあ、これからが正念場だ。樹林帯の急登をいく。下りの集団が通過した後なのか、歩幅が合わせにくくステップもきりずらい状態だ。また、ザックが肩に負担をかける。ゆっくり歩くと汗をかかずに済むが、肩が苦しいまま休めないため、がんばってある程度登って後ろと差がついたところで腰をかがんで肩を休ませる。登りは傾斜が急になっても大丈夫だが、荷が重いのはやっぱりいやだ。力のない私は、自転車でも軽量マニアでカーボン、チタンといった新素材を駆使してできるかぎりの楽をしているが、山ではそういったズルもできなく苦しむ。しかし村上さんはもっと苦しそうだ。元気な古山さん、馬淵くん、それに私で村上さんの荷物の一部を分配してまた登りはじめる。

高千穂平に着いたのは午後3時頃になっていた。テン場ではすでに登頂後なのか、みんなくつろいでいるが私たちはこれからテントを設営しなければならない。しかもここはまっ平なため、風はふきさらしでハンパじゃなく強い。強風に伴って狙撃し

てくるアラレに、頭がわれてしまうのではと感じるほど苦しくのたうちまわり、私は設営の間まったく戦力にならなかった。このとき鬼のように元気だったのが、やはり本図さんと古山さんだ。役たたずの自分に心苦しく感じながらも、よこで頭を抱えてもだえている間に完全な防風仕様のテントはできた。設営に尽力なされた皆様に感謝しつつ中に入る。うれしい一瞬だ。

この日の夕食は本図さん特製かつどん&年越しそばと豪華絢爛だ。本図さんは無線で何度も「こちらはテントでかつどん&年越しそばですよ、カッカッカ（笑）」と強調し、毎日食事はジフィーズとラーメン、寝どころは雪洞あるいはツエルトでの生活を余儀なくされている東・天狗隊に情け容赦なく追い打ちをかけた。私は疲れから、アルコールのまわりがはやくぶったおれてしまったが、古山さんは対照的に「今日は外で寝ますから」と平然と喋るのけみんなを驚かせた。制止する本図さんも説得をあきらめ、古山さんはテントのよこにつくったスペシャルお棺に入った。

人気者の古山さんはまだACC-Jに入って間もないというのに、すでにアダ名をたくさん持っている。「教授」、「ヘンタイチョウ」（いったい漢字でどう書くのか疑問だ）、それに「文ちゃん」である。「文ちゃん」とはいうまでもなく孤高の人、加藤文太郎氏を指す。その伝説の名を継承しているくらいなのだから、シュラフのみのピバークなんて外気温50度以内ならいとも簡単にやってのけてしまうのである。

元旦、外にでてお棺をのぞくともぞもぞ動いているので「あつ、いきてる。」とあたりまえだが感動する。今日はいよいよ南峰アタックだ。天気も上々、風はあいかわらず強いが昨日ほどではない。出発してすぐ初日の出を拝むことができた。冷乗越の直下が急登だが、今日は荷が軽いため苦しくない。2時間足らずで冷乗越着。ここで展望がひらけたとたん、黒部川越しにひじょうに目立つ山がみえた。すぐに「剣だ!」とわかった。まったく予期していなかったところから突然劇的に姿を現したことに感激し、はじめてみる圧倒的な存在感をもった山容に驚愕した。写真と現物では比べものにならないことをいまさらながら痛感した。剣をみることができただけで、今回の山行はもとをとったようなものだ。左手には富山湾をバックに剣・立山、前方には大きく立ちのぼる鹿島槍というぜいたくな展望の中、冷池山荘・布引山と気分よくアップダウンを繰り返す鹿島槍南峰に到着。最高だ。

頂上で20分ほど休んだあと下る。このとき冷池への途中で不注意から、眺めていた地図を風にもっていかれてしまった。余白にコースタイムも書いていたため、記録もともに大空へ消えていった。当然、今回の到着何時、所用何時間というのはおぼろ



鹿島槍南峰下にて

庄司 古山

馬淵 村上



鹿島南峰頂上

古山 馬淵

村上 本図

げなものとなった。ごめんなさい。

冷乗越からの下りでザイルを張った以外はなんということもなく高千穂平に戻る。この夜、東・天狗隊も北峰直下まで到達し合流していたため無線交信もくつろいだものとなった。また、ビバークの実績をつくってしまった古山さんは、本図さんに「今日も外で寝るんだろ！いやーテントが広く使えてうれしいな。」と昨晚とはうってかわってビバークを強要され、就寝時にはテント半強制撤去となった。

1/2、今日は村上さんに留守番を頼み、4人で東・天狗隊をむかえに行くこととなった。余った時間で爺ヶ岳をピストンし冷乗越で待つ。そこから古山さんと馬淵くんは先に高千穂平に戻り、本図さんは冷乗越で待ち、私は空荷で布引方向へむかえにいった。

東・天狗隊は全員バラけてやってきた。名雪・所・中居・佐藤さん、みんなマックロで元気そう。冷池を過ぎたところで高田さんと再会、後ろに生井さんがいるとのことなのでさらに進んだ。しばらくして生井さんがきた。遠目にもよたっているのがわかった。近づくるとたいへん酒臭く、ザックはだらしなく斜めにパッキングされており、前夜の酒宴のほどを全身で表現していた。ACC-J最強の人も、今ではただの酔っぱらいと化していた。背負いずらいザックをかつぎ、生井さんと冷乗越へ向かう。剣もしばらくは見納めなので目にしっかりと焼き付けておく。最後に生井さんと私が冷乗越に到着後、本図さんと生井さんの2人を残して順次高千穂平へ下山する。生井さんは、本図さんにザイル回収を頼まれたからだ。生井さんはひどい状態だが、それでも本図さんの絶対的な信頼をうけている。さすがである。

全員高千穂平到着。東・天狗隊もテント・ツェルト設営し、その夜は11人による合同飲み会となり話に花が咲いた。また、この日も当然古山さんは、私たちはテントを広く快適に使え、古山さんは訓練による耐寒能力の向上ができるという相互の利益を共有しあつてのビバークとなった。「文ちゃん」の称号が与えられた人間にテントで寝ることはもう許されないのか？

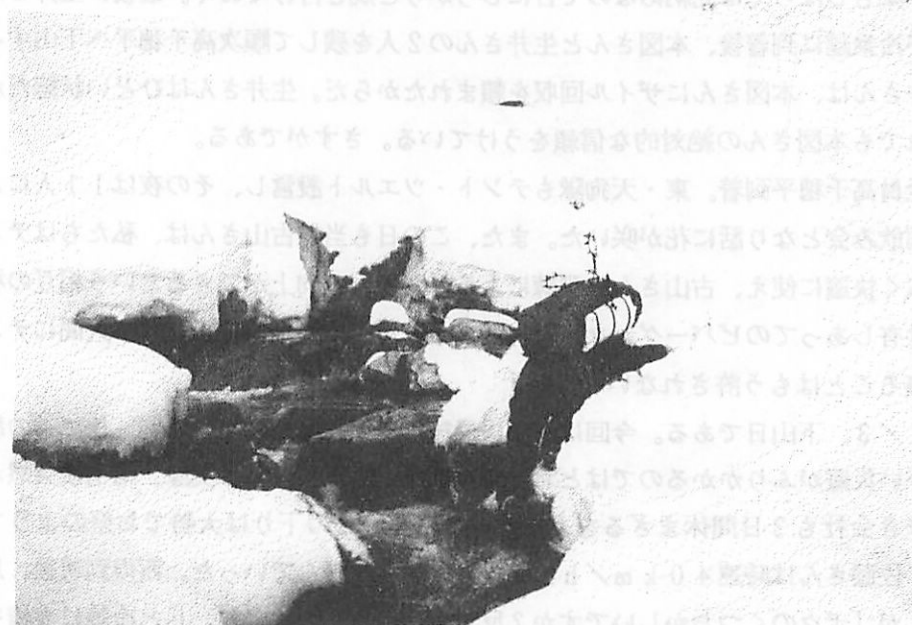
1/3、下山日である。今回はついに最後まで天候は崩れずじまい、後で神の怒りをかい災難がふりかかるのではとおもえたほどだった。（私は実際、帰宅後突然かぜをひき会社も3日間休まざるをえなかった。）今日の下りは大勢でお祭りのようである。佐藤さんは時速40km/h位のシリセードで飛んでいった。西俣到着後、馬淵くんが「ボクのくつおかしいですか？反対みたいなんですよ。」と冷静に表情をかえず聞いてくるので、みると明らかに逆だった。「こんなのでよく平気で下れた



高千穂平にて

本図

中居 庄司 高田 佐藤 古山 村上
名雪 所 馬淵
生井



水の中にドボンの村上

ね。」と驚いていうと「べつに痛くもなかったですよ。プラブーツは反対にはいても大丈夫なんです。」とまた淡々という。彼もまた古山さんとは違うタイプのとんでもない大物かもしれない。

そして今山行最後を迎え、もっとも盛り上がりを見せた。小さな沢を飛び越さなければならぬのだが、ラストが村上さんとなったからだ。みんなの期待はいやがうえにも上昇し（何の期待だ？）、村上さんには気の毒なほど重圧がかかる。プレッシャーからか何度か躊躇し、そしてついに挑戦！全員の視線が村上さんに集まる中飛ぶ、が少し落ちるだけの最小限の被害で済んだ。期待は裏切られ全員拍子抜けしたが、中でも所さんは「なーんだ、つまんねーの。」とあからさまにいつてのけ、がっかりした様子を隠そうともしないほどだった。

そしてまだ体力が余ってしょうがないのか、温泉・そば屋・大町駅と爆発的な破壊力で蹂躞しまくって帰途についた。

今回の山行は奇跡的なくらい天候に恵まれ比較的楽だったが、昨年の春合宿の前穂では悪天のため予想外に苦しんだ。山ではどうなるか、まったく予測できないところがおもしろい。

(庄司 記)



正月合宿—鹿島槍ヶ岳

1992. 12. 31～1993. 1. 3

パーティ L 本図一統、庄司真陸、古山正文、馬淵勝則、村上晴美

今回の正月合宿は鹿島槍だということだ。ぜひ、行ってみたいと思ったが、冬山にまだ本格的に行ったことのない私が行って、果たして帰って来られるだろうか。縁起でもないと思いつつ、部屋のかたづけや、会社の仕事の整理をしてから山行に赴く。

大谷原から西俣出合までは、ゆるやかな道を少しずつ登って行く。雪が舞っているため鹿島槍はみえない。西俣出合から赤岩尾根（長ザク尾根）の急登であり。休憩のたびに、ザックの中の荷物が、庄司君や古山さんや馬淵君のザックの中に移動する。これで果たして上まで登れるのだろうかなどと考える余裕もあまりないほどバテている。やっと、高千穂平に到着。まずは天幕を設置するために整地及び風よけのブロック積みである。私は半分睡眠状態にはいって、整地やブロック積みの手伝いをする。テントの中で暖まって一息入ってから夕食の準備にかかる。大晦日の夕食のメニューは、カツ丼と、年越しソバである。東尾根パーティの天井落盤のニュースを無線で聞きながら、テントはいいなあと思ったりして夕食である。

さて、夕食のかたづけも済み、明日の準備も終えて、テントの外に出てみると、暗れていた。目の前にとてつもない存在感で、それは月の光に照らされていた。強い風に吹かれながら、私は呆然としてそれを眺めた。こんなにものすごいものを見て良いのだろうかと思っていた。それとは実は布引山から鹿島槍だったのだが、私には、空からの水を集めて落とす巨大な瀑布と思えた。

次の日の朝、鹿島槍のピークを踏む日である。今日は朝から暗れている。東の方を眺めると、雲海が広がり、ところどころ山の頂きがのぞいている。雲海は休む間もなく蠢いており、この風景は、例えば世界の果ての風景、もしくは、人類が滅亡した後の静かな地球の姿なのかもしれないと思ったりする。昨夜見せてもらった景色といい、日常の生活では見ることのできない、圧倒される自然との出会いであった。

無事、鹿島槍も登り、他のパーティと合流し、下山する途中の西俣出合では、鹿島槍が良く見えた。雪煙が縋引いていた。何日間か、あの場所にいたのだなあと思い、また来たいと思った。

(村上 記)

松木沢氷壁訓練

1993. 1. 31

パーティ L 鯉河仁志、生井一男、本図一統、中居康展、古山正文、
庄司真陸、笹沢ひろみ、

水道の蛇口が凍るようになってくると、松木沢の氷瀑のことが気になってくる。昨年の氷登りは、参加したメンバーから大変好評であった。単純な私は、後輩が喜んでくれると、又連れて行くしかないと勝手に思い込んでしまうのです。そんなわけで集会で中居に声をかけると、その他数名参加することになった。本図、生井のACC-J最強コンビも参加してくれることになり私としては、有り難い限りである。

当日は、いつもの下館に9時集合、「外で寝るのは寒いから車2台で行くべ」ということになり、ワゴン車2台で出発。昔と違いリッチになったのか軟弱になったのか判断がつかない。途中車の中で生井が昨日パチンコで20万儲けた話を聞かされる。儲ける前にいくら負けたことか心配になってくる。松木沢の車止めに1時30分着。早速いつものとおり酒を飲む。この酒はもちろん生井のごちそうである。誰かが無理やり買わせたという話もあるが定かではない。寝ようと準備していると古山がシュラフだけで外に寝ると言い出す。正月合宿も外で寝たそう。良い根性をしていると感心してしまう。みなさん見習いましょう！私は年なので遠慮します。

1月31日、7時起床。1月の朝にしては暖かい。車止めからさらに奥まで車で入り目的の黒沢対岸まで行くことができた。アプローチは河原を渡るだけとなる。対岸から見る黒沢は例年より氷の発達が悪いようで岩がところどころ露出しており、心配になる。とりつきに行くと、やはり氷の状態は良くない。しかしせっかく来たのだから登ることにする。生井がトップでF1にとりつく。初めての笹沢、庄司以外は物足りない様である。いつもは見事な氷瀑のF2、F3も氷が薄く、技術的にも難しそうに見える。また生井がトップで登るが彼の現在のレベルからみるとらくらくのようである。本図大先生も新品のバイルを片手に「氷はやっぱり道具だ」と華麗な登りを見せてくれる。昨年は、初めての氷登りでかなりてこずっていた中居も今年は見違える登りだ。F3まで全員で登り、懸垂で取り付きに戻る。混雑してきたので下山とした。氷登りは道具だと改めて痛感した一日であった。俺も来年までにバイルを二本買うぞ。(51 山古) (鯉河 記)

茨城岳連冬山講習 一山スキー講習一

1993. 2. 6~7

参加者 古山正文

安達太良山で行われた茨城岳連冬山講習会の山スキー講習に参加した。登攀技術講習に参加する馬淵君と土浦で合流し、午後10時に出発。あたらスキー場駐車場に1時半頃到着。道路は完全に乾いていて、チェーンは使用しない。星が見えるのだが、風はとても強い。車中で小宴の後仮眠。翌朝8時半にスキー場ベンチに集合。ここで山スキー班と登攀技術班に分かれる。

山スキー班は9名参加で、全員経験者ということで、実践のひとつとして経験してもらえればということになる。シールを付け登行開始、勢至平で昼食。五葉松平の方にゴンドラの建物が見えるが、強風のため動いてないようだ。ここから簷山をめざして登行する。鉄山分岐付近では風が強い。分岐からは、くろがね小屋までの下りだけである。所々に吹き溜まりがあるが、斜面の雪はしまっていて快適な滑りである。しばらく下った後適当な斜面で登り返し、滑りを楽しむ。小屋にはあっという間に到着。小屋の前での雪洞堀を見学。温めの温泉にはいる。夕食後、机上講習となるが、山スキーの班はお酒を飲みながらのスキー談義となる。転倒しないのが一番であるとの意見で全員一致。消灯後、我々の部屋だけ宴会を行い、結局10時半頃就寝。

翌日は、昨日の分岐までシールを付け登り返し、分岐からトラバースして山頂直下でスキーをデポし山頂を踏む。頂上付近は相変わらず風が強い。天気も悪くなり始める。五葉松平方向への滑り出しは雪が少なくつぼ足で歩く。その後、大きな斜面が現れ楽しく滑る。五葉松平直前の斜面下でお茶を沸かし休憩、登り返して滑走を楽しむ。五葉松平のブッシュを通過して、スキー場のゲレンデに滑り込む。とうとう雨が降り出してきた。登攀技術の班と合流後、雨の中で解散式を行って、馬淵君と土浦への帰路についた。

2月6日 ゲレンデ 9:30 - 勢至平 11:45~12:30 - 鉄山 13:30 -

くろがね小屋 15:00

2月7日 くろがね小屋 8:00 - 安達太良山 10:00 - 五葉松平 11:00~12:20 -

ゲレンデ 13:00

(古山 記)

県岳連冬山講習会

1993. 2. 6~7

参加者 馬淵勝則

あだたらスキー場の駐車場にて一泊。寝酒のおかげかぐっすりと眠れた。ロッジで軽く朝飯を食べた後集合場所へ。開会式のあとは山スキーと登攀の班とに別れるので古山さんとは別行動である。登攀講習の参加者が予定より少なく、また、指導員受験の方がけっこう多かったので、受講生と指導員はほぼ同人数ぐらいだった。

最初、ピッケルの持ち方から始まったが、早速「持つ向きが違う」と注意を受けてしまった。ピッケルはいつでも滑落停止の姿勢がとれる向きに握るとのこと。また、ピッケルバンドは肩掛けの方がよいとのアドバイスも受けた。そして、くろがね小屋へと出発。途中の斜面ではワカン歩行の練習をした。僕は要領が悪いらしく何度も指導を受けてしまった。小屋到着後は近くの雪面で訓練が続けられた。滑落停止や雪面歩行の練習をしたのだが、ここでも僕は飲み込みが遅く、いろいろな方から指導を受けてしまった。僕一人に指導員3~4人かかりきりである。少し情けなかった。山スキー班の人達と合流した後は雪洞講習があった。

小屋に入り、入浴、食事をした後はザイルワークの練習、大阪岳連方式での滑落の止め方で指導員同志意見が分かれ、傍らから見ていた分にはおもしろかった。昼間、様々な方から指導を受けて気付いたのだが、同じ事柄でも指導員によって多少の食い違いがあるのである。例えば滑落停止の姿勢においても、ある人がブレードは鎖骨の位置だということでそうすると、又、別の人が来て、「違う、高すぎる」と注意したりする。登山の技術というものは形だけ人から教わっただけではダメで、自分の体格や体力等を慮り、自分なりに身につけていくものなのかもしれない。

二日目は、山頂へピストンする道程で滑落停止の復習やアイゼン技術を練習した。そして昨夜教わった、ザイルによる確保の実習も行った。大阪岳連方式は、ループにして握っているザイルを投げるタイミングが難しく、一度もうまういかなかった。今日の講習は午前中のみでお昼ぐらいには下山、十三時頃には閉会式となった。指導員の方々が親切丁寧に色々と教えてくれ、中身の濃い二日間だった。

(馬淵 記)

八ヶ岳 赤岳主稜

1993. 2. 11

パーティ L 佐藤文則、中居康展

いくらなんでも先週は悔しすぎた。大同心の基部に着いた時は確かにヘトヘトで、初心者らしき人を連れた先行が2〜3パーティいたのだから、引き返したのも間違いではないだろう。しかも、彼らが戻って来たのは7時を回っていたのだから。それにしても、悔しいのである。

今回は何としても登ろう、そう願いながらやって来た今日、うれしいことによく暗れている。昨日の夜、下館から3時間半かかって美濃戸山荘についた。6時30分には行者小屋目指し歩き始めた。小屋につき大急ぎでテン場を整地する。そこから後は高田さんと馬淵君がやってくれると言うので、お言葉に甘え、登攀の用意をし、10時には出発。前回はこの時間にやっと小屋に着いたのだった。

文三郎道を少し登り、急登になる手前で左の沢に入り、トラバースし取り付く。以前は、沢をもっと下から詰め、1ピッチ目に取り付いたらしいので2ピッチ目に取り



(58 写真)

赤岳頂上にて 中居 佐藤

付くことになる。1ピッチ目を中居さんがなんなく越え、佐藤が2ピッチ目に行く。ちょうど1ピッチ目の終了点に二人でいるとき高田さんと馬淵君がひょっこり現れ、文三郎道から手を振る。写真を撮ってもらい上へとザイルを伸ばすが、上手く流れない。セットを失敗した。行ったり来たりを繰り返し何とかザイル一杯まで引っ張りトップ交替。その後3ピッチ程なんて言うこともない雪面が続き、岩稜がようやく出てきた。幸いにもトップは僕の番なので先に行かせてもらう。まず、リッジの側壁のような所を登り、滝の落ち口のようにになっている所をやや強引に乗っ越す。また2ピッチだらだら登ったあと今度は、中居さんのトップでクラック状の岩を抜けると頂上直下である。ああよかった、今回はとりあえず登った。そう言いながら地藏尾根を降り、高田さんと馬淵君の待つテントへ向かった。

発 6:30 - 行者小屋 9:10~10:00 - 取り付け点 (2ピッチ目) 11:15~11:25

- 赤岳頂上 14:25 - 行者小屋 15:50

(佐藤 記)

八ヶ岳赤岳登頂

1993. 2. 11

パーティ L 高田暢年、馬淵勝則

美濃戸小屋駐車場で朝を迎え、6時半頃出発。約3時間位で行者小屋に到着した。冬の山なんて人気の無いものと思っていたが、意外と張ってあるテントの数が多く驚いてしまった。世間で言われているほど、登山はマイナーではないのかもしれない。「世の中、暇な人が多いなあ」と勝手なことを考えながらとりあえずテントを設営。そして、僕と高田さんは文三郎尾根へ、佐藤さん、中居さんは岩場へと出発した。文三郎尾根と佐藤さんらがとっている岩場のルートは半ば併行しており、途中、その登り具合を観察することができた。怒鳴れば声も届くくらいである。文三郎尾根からの景色は悪くはなく、右手には阿弥陀の北稜がきれいに眺められた。なかなか急な斜面

に見えたが僕にでも来年位には登れるだろうとのこと。がんばらなくては。できれば冬山で単独登山ができる程の技術をもてるようになりたい。

分岐を過ぎ稜線に出た頃から天気が悪くなってきた。地形のせいか、吹き付ける風がめちゃくちゃに強く、とても寒い。しかも、鎖場が続き恐ろしく怖かった。赤岳の頂上にでも視界が悪く、富士山ぐらいしか見えないのでろくに休憩もせずにとっとと下山してしまった。

テント発 10:45 ～ 頂上 13:10 ～ テント着 14:50
(馬淵 記)

八ヶ岳、横岳西壁 中山尾根

1993. 2. 12

パーティ L 佐藤文則、中居康展

前日に赤岳主稜を無事登攀して調子が上がっているので、お次は予定通り中山尾根を登ることとした。朝起きてみると赤岳、阿弥陀岳はガスの中。天候はいまいちだが取りあえず行ってみようということで出発した。なんといっても平日だし、この天気ではほとんど取りついているのはいないと思っていたが、中山尾根の下部樹林帯で一パーティ抜き、更には取付きで7人のパーティ、大阪府岳連の人達だったかが準備しているではないか。こちらはテント場でハーネスもヘルメットも着けてきただけに、彼らを取りつくまでの順番待ちで1時間も雪の中で待っているのは苦痛以外の何者でもなかった。

さて先行のラストが登り始めたところでこちらでも動き出す。下部岩壁はⅣ級、Ⅳ一の二ピッチで中居、佐藤の順につるべで行く。手袋にアイゼンではⅣ級もなかなか難しい。下部を抜けると易しい雪稜で、先行も既に視界にない。少々いやらしい所もあったがコンテニューアスで上部岩壁の基部まで進む。先行はここで直登と右の凹角を登る二組に別れており、直登の方が早そうだったのでこちらを登ることとした。下で見ていると、先行のラストが滑ったりしているのになかなか手強そうである。ルート

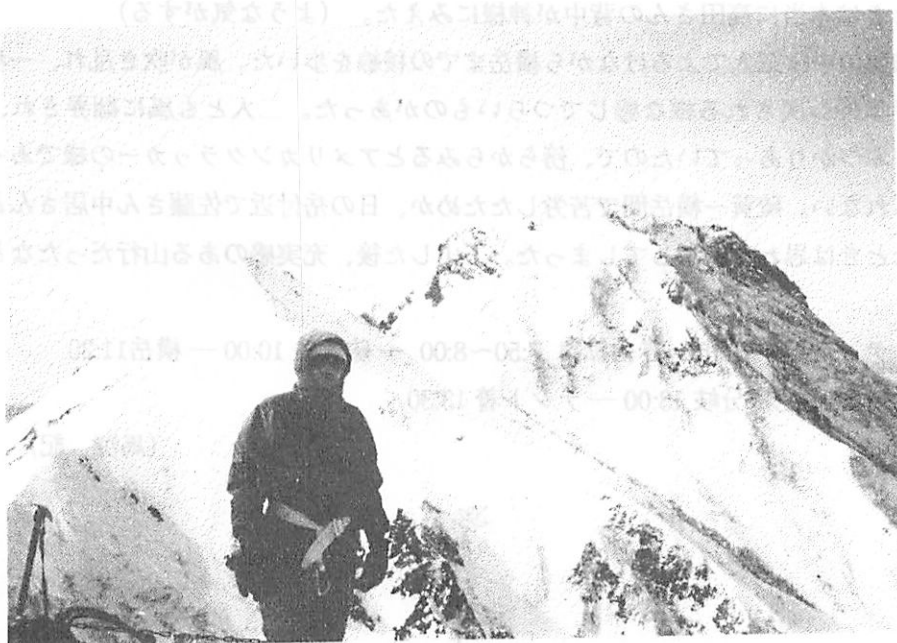
図中では核心部Ⅳ十で確かに難しい。右に抜きたいが手袋越しのホールドが頼り無く迷う。真上に残置シュリングが垂れており、これをつかんだと思ったとたんに落ちた。何だか良く分からないうちにザイルにぶらさがっている。佐藤君、止めてくれてありがとう。膝をぶつけたがこの時はあぶつけたなという程度で、登り切ってから痛み出した。

核心部を何とか抜けてからセカンドでフォローするときの心安さといったら全く比べようがない。最後のピッチなどは簡単なのは分かっているんだけどトップで行くのがおっかないのである。意外に早いペースで稜線に抜け、ザイル等を片づけていると高田さんたちと一般道で合流することとなった。文三郎道を下りテントに戻ったときは久々にほっとするものがあつた。とりあえず予定通り一本登れたし、それ以上に国試前の大事な体、無事に下山できたのだから上出来である。

テント発 6:30 — 取り付き 7:40~8:40 — 第2岩峰下 10:00 — 稜線 12:25

— テント着 13:30

(中居 記)



横岳をバックに 馬淵

硫黄岳～横岳縦走

1993. 2. 12

パーティ L 高田暢年、馬淵勝則

6時40分に中山尾根へ佐藤さんと中居さんが出発。30分遅れで僕と高田さんは硫黄岳へと出発した。鉱泉を過ぎた後は樹林帯の中の単調な登りが続き、本当にうんざりするくらいのどかだった。

けれど、森林が途切れた辺りから天気が急変、粉雪と風が鬼のように吹き付け、いつの間にかまつげが凍ってバリバリいていた。もちろん山頂での展望も全くだめ。見渡す限り真っ白で何も見えなかった。硫黄岳の山頂はだっ広く、ただ雪だけが舞い踊っていた。とりあえず横岳へと向かうのだが、視界が悪くなくどっちがどの方向なのだから全く僕にはわからない。四方とも同様の真っ白な風景にしか僕には思えず、自分が登って来た方向も良く分からなかった。なのに高田さんは「こっちだよ」と言ってずんずん進んで行く。このときほど高田さんが頼もしく思えたことはなく、視界が聞かない中、高田さんの黄色いスパッツを目印にずっと背中について行った。このときは本当に高田さんの背中が神様にみえた。(ような気がする)

強風の中、二人でよろけながら横岳までの稜線を歩いた。風が吹き乱れ、一歩進むと半歩押し戻される様な感じでつらいものがあつた。二人とも風に翻弄され、よろけ、ぶつかりあっていたので、傍らからみるとアメリカンクラッカーの様であつたかもしれない。硫黄～横岳間で苦勞したためか、日の岳付近で佐藤さん中居さんと遭遇したときは思わず感激してしまった。下山した後、充実感のある山行だったなと思つた。

テント発 7:20 — 赤岳鉱泉 7:50～8:00 — 硫黄岳 10:00 — 横岳 11:20

— 地藏尾根分岐 13:00 — テント着 13:30

(馬淵 記)



ハヶ岳 阿弥陀岳北西稜登攀

1993. 2. 13

パーティ L 高田暢年、中居康展、佐藤文則

2/11~14でハヶ岳の行者小屋にベースを張り、前半2/11, 12は馬淵を連れて赤岳、横岳付近を縦走（詳細は馬淵の記録を参照の事）。そして2/13私にとっては今回の山行のメインとしていた阿弥陀岳北西稜を登攀した。このルートはハヶ岳の登攀ルートの中でも人気があり、その上、決して簡単なルートではないと思われる。ハヶ岳に通い出して何年かになるが、ここだけは残したくないルートだと前から思っており、たまたま今回は中居、佐藤といった強力なパートナーが揃い絶好のチャンスだと思い、馬淵には悪いがテントキーパーをしてもらい、3人で出掛けた。

朝雪がちらほらと降っており、ガスで稜線が全く見えない状態であったため一時は諦めたが、7時頃急に天気が回復一気に快晴となった。阿弥陀岳北西稜の上部岩壁もよく見える。急いで準備をしテントを飛び出す。

行者小屋より15分位南沢を美濃戸方面へと下る。阿弥陀岳北西稜への入り口はテントが2張りあり、このパーティは既に出発しているようであった。前日偵察で来た時は古いトレールしかなく膝位までのラッセルだったので、取りつきまでかなり時間がかかるのを覚悟していたが、先行パーティのおかげで一時間位で稜線に出てしまった。我々が稜線に着いた時、先行パーティはまだ登攀準備中であった。我々も早速登攀準備にかかるが、稜線上は風が強く、日は射すのだが体感温度は非常に低く寒く感じた。

最初はナイフエッジが2ピッチ続く、先行パーティはザイルを出していたがトレールが有るし、そんなに難しそうも無かったので、コンテで登る。先行パーティは学生の山岳部らしく先輩らしき人物はまあまあ登るのだが、後輩らしき人物はもたついていて、ちょっとした岩場でも時間がかかり、待っている方も寒くてしょうがない。しかし彼らのおかげでラッセルをしなくてすんだのだから、しょうがないと我慢する。岩稜を通過しその後、第一岩壁にぶつかる。ここも色々ルートが有るようだが我々は左側をトラバースしてそこから雪壁を木登りで登り第二岩壁の基部に出た。

ここがこのルートの核心部である、ルートは4本あり先行の3パーティはそれぞれのルートを登っているが、我々は一番ノーマルと言われているルートを登った。まず

私が岩壁基部から左上に伸びるバンドを伝い、ここで一旦切ったところで佐藤を登らせる。場所が狭く入れ替われそうもなかったのもそのまま佐藤が右上へ走るバンドを登り、最後の凹角の手前でピッチを切りそこまで中居が一気に登っていった。最後の凹角は私の所からは見えないがルート図には人工で登る様子に書いてあった。しかし佐藤はフリーで登れそうだと言うので私がそのまま佐藤を確保して登らせた。登ってる佐藤の姿は全く見えないがザイルが順調にのびていく。やがて最後の岩稜のギャップのところに佐藤の姿が見えた。そこが核心部の終了点らしく、そこでピッチを切って中居が登り、中居はそのままザイルをいっぱいまでのばす。ようやく私の番が来た。ずっと狭い所で同じ体勢で確保していて体が固まっていたので、動けるのがとても嬉しかった。佐藤にザイルで引っ張り上げてもらう様に何とか核心部をフリーで登り佐藤の所へ辿りついた。佐藤に「お前よくここをトップでフリーで登ったなあ」と言うと、「トップだから必死で登れたんですよ。セカンドだったら泣いてましたよ」彼らしい回答が帰ってきた。

そこから摩利支天までは簡単な雪稜を2ピッチザイルをのばす。摩利支天で記念写真を撮り登攀具をザックの中にしまいこみ阿弥陀岳の頂上へと向かう。何年も前からの課題が又ひとつかたずき一人満足感に酔いしれていると、中居と佐藤は「中山尾根



阿弥陀岳頂上にて 中居 高田 佐藤

の方がおもしろかったな」などと水をさす様な事を言っていたが、聞こえないふりをして馬淵の待つ行者小屋のテントへと下っていった。

登攀中は一切無線交信ができなかったのでテントへ戻ると馬淵が心配して待っていた。早速無事登攀を祝って酒盛りが始まった。翌日は下山なので酒を残す必要はないとばかりに飲んでいて、いきなりテントに何やら奇声を発しながら人が飛び込んで来た。最初はどこか別のテントの酔っぱらいがテントを間違えて来たのかと思ったら菊地さんだった。鈴木さんと阿弥陀岳の北稜を登りに来たとのこと、突然のゲストを迎え更に宴会は盛り上がった。

翌日、朝起きてみると雪が降っていた。天気が良ければどこか一本登ってから帰ろうかと思っていたが、この天気なのでさっさとテントを撤収し下山した。速い時間だったので中央高速は全然混んでなく昼過ぎには土浦に着いた。

ハヶ岳の西面の主だったルートは大体登ったので、来年もし機会があれば東面も登ってみたいところである。

テント発 7:40 — 尾根上 9:00 — 取り付き 9:40 — 摩利支天 14:05

— テント着 15:10

(高田 記)



シュンラン

阿弥陀岳北稜

1993. 2. 12~14

パーティ L 菊地光夫、鈴木操

今回の山行は、冬山の素晴らしさと満天の星空を楽しみに、酒をいっぱい持って酒飲み山行をと思い土浦を出発した。

翌日朝、美濃戸口を出て南沢を越え行者小屋へと向かう。天気は快晴で下界の空よりも一段と青く感じた。今年は雪も多く、途中膝位はあった。でも連休なのでトレールはバッチリ、人もたくさん入っており、ガイドが子分を連れて行くのとよく出逢った。約2時間歩くと行者小屋に着く。小屋でお茶を飲み昼飯を食べる。

午後にも良く晴れていたので阿弥陀の北稜へ向かう。小屋の前より阿弥陀のコルを目指して約1時間で北稜の核心部である岩の所へ着く。午後の2時半を過ぎると天気の変わるのが非常に早く、空が青からグレーの厚い雲に覆われる。1ピッチを伸ばすが先行パーティがあり、新人の女性がいたので少し順番待ちとなる。少し左側の凹角の所より登り始める。先が進まないで難所の所まで行きお尻とアイゼンを手で押さえてやり、上に登ってもらう。そこで先行パーティを抜かせてもらう。快適に2ピッチを伸ばす。鈴木さんも息をきらせながら登ってくる。頂上はもう一息、コンテで頂上へ、握手で完登を祝う。行動食を食べたいが風が非常に強く一刻も早く下りたい。急な下りを足元に注意しながら急いで下りる。鈴木さんは年の為かマイペースでゆっくり下る。私は一足先に行者小屋に行き、先行パーティのテントを探す。そして合流。

本隊の4人パーティはすでに酒が入っており、どの顔を見てもニコニコ顔であった。鈴木さんもようやくテントにたどりつき、今度は6人でまた盛大に酒のみパーティーとなる。いつのまにかビールも底をつき、新人の馬淵君は、寒い中行者小屋へとビール買に走る。又そのビールも底をつくと睡魔がきて、雪の中を四つん這いになって隣のテントへ戻る。コック長の鈴木さんが鍋焼うどんを作ってくれて食べ終わると疲れがきて眠りにつく。だが寒さのため3時間位で目が覚める。ヤッケの上下を着てまた眠りにつく。後はじっとガマンの朝をむかえる。

昨日とは打って変わって風が突風となって、これでは今日は登れないと思い下山の準備となる。先行パーティは、我々より1時間程早く行者小屋を後にした。我々も連休で中央高速が混むと思い、いそいで八ヶ岳を後にした。(菊地 記)

上州武尊山 山スキー

1993. 2. 21

パーティ L 高田暢年、本図一統、中居康展、古山正文

集会で、中居君の”川場スキー場から武尊山へのいい山スキーコースがある”との言葉に誘われ山スキーに出かける。下館集合、本図さんの車で出発。渋川から川場への道路には雪はまったくついていない。スキー場へは1時半頃到着。車中小宴の後仮眠。

翌日は8時からリフトが動き始める。最初はゲレンデで滑ることになり、いちばん上のゲレンデで3回滑りの練習を行う。高田さんは登山靴での滑りは始めてで、感じがまるで違うといっている。リフト終点から、スキーをザックにつけてかついだり紐で腰につけ引っ張る形で、つば足での登はん開始。菊池さんはゲレンデでのスキーとなりここで分かれる。最初の登りを終わるとスキーでの滑走。尾根の西側の樹木の中を滑りコルへ。コルからはシール登行となる。ブッシュ帯の登りはスキーがブッシュに刺さり嫌らしい。190cmの板を履いた中居君は特別苦労しているようだ。山頂に近づくにつれガスが出始め、さらには雪が降り始める。

頂上直下のところで、頂上を踏むことをあきらめ沢に向かっての滑走開始。本図さんが一番に滑り込み、我々も続く。昨日降り積もったと思われる新雪の深い雪の滑走で、非常におもしろい。雪の中を浮いたり潜ったりして、滑りを楽しむ。五体投地の繰り返しである。沢の下のところでは最中状の雪になっているところがあり滑りにくい。さらに下ると、沢の雪が切れはじめ、スキー場への尾根の登り返しとなる。シール登行でも新雪のため先頭交代しながら登る。ある程度登ると、嫌らしい長いトラバース開始であった。スキー場は見えないが、音楽が聞こえ、スキー場は近い。トラバースを終え直登すると、スキー場のリフト終点にひょっこり到着。ここで、昼食を取る。本図さんにお裾分けしてもらったあったかいうどんがたいへんおいしい。後はゲレンデを滑って、途中菊池さんと合流し終了。帰路につく。

リフト終点 9:45 - 頂上直下 12:20 - 滑走終了点 13:00 - リフト終点 15:00

(古山 記)

荒沢山～足拍子山縦走

1993. 3. 28

パーティ L 生井一男、中居康展、古山正文、庄司真陸、本図一統

3月27日朝起きると体がだるい。それに頭も痛いし、数日前から鼻がぐずぐずしている。私はもともと花粉症があるのでそのせいかな。聞くとところによると今年は花粉症がひどいらしいが、私は今年は調子がいい。もしかすると治ってしまったかな、と喜んでいたので・・・やっぱり。いやまてよ花粉症のときは頭が痛くなったり体がだるくなかったことはない。花粉症とちがうかも・・・と思い、熱を計てみると案の定7度2分ある。風邪をひいてしまったらしい。実は今日の山行は私が言い出しっぺなのだ。初めは生井と三人で行くことになっていたのだが、八ヶ岳に行くことになっていた三人も急きょパーティに加わるようになった。生井とは先週一ノ倉中央カンテに行くことになっていたが、彼の仕事の都合で中止になった経緯（つまり貸しのこと）があるので、生井だけなら山行を断ることもできるが、他の三人には言いにくい。夕方まで様子をみたがやはりおなじだった。とりあえず解熱剤の



荒沢山から足拍子への稜線

座薬をぶっこんで家を出る。下館まで向かう車の中でいろいろ考える。“やっぱりよ
そうかな。無理して登ってみんなに迷惑をかけても悪いし。でも俺が行かなかったら
取り付きがわかんないだろうな”……………。

下館に行って仲間の顔を見たら“現地まで行って調子が悪かったら取り付きを教え
てから車の中で寝ていよう”と心が決まる。言い出しっぺと言うこともあり、“俺は
行かない”とは言えない。持って生まれた責任感の強いのも善し悪しだな????。

28日朝、目を覚ますとまづまづの天気だ。天気予報で午前中の勝負だということは
わかっているの、なるべく早く出発しなければならない。熱のほうも昨夜の解熱
剤がきいているようなので自分も行くことにする。たとえ熱があっても私の性質では
行ってしまったにちがいないだろうけど……………。

取り付きは以前、佐藤
と来たことがあるのです
ぐわかった。荒沢山カド
ナミ尾根を登る。雪は締
まっているし、何日か前
のトレールがあるため
ラッセルはないのでピッ
チがあがる。あーあ、頭
が痛い。体がだるい。咳
が出る。くしゃみが出
る。鼻水が止まらない。
でも来なければ良かった
という気持ちは全くな
い。約2時間で荒沢山に
着く。いよいよここから
足拍子までが核心部だ。
アイゼン、ハーネスを着
け出発。ちょっとしたナ
イフリッジを進み土樽側
をまいてコルにでる。コ
ルからの登りは急だがザ



足拍子へ進む

イルをだすほどではない。今頃になると雪庇も小さくなっており通過は楽だが、それでも雪庇の上を行かなければならない所が何カ所があった。

庄司は雪になれていないので、だいぶもたもたしている。以前の私だったら「庄司！なにもたもたしてんだ！もっと、おもいっきりアイゼンを蹴りこんで、体を雪から離せ！」と、怒鳴りとばすところだが、今はどうでしょうか。「庄ちゃん、天気が崩れてきそうだからもう少しはやく行きましょうね。おやおや！どうしたの！好きな女の子を抱くように雪を抱いてはいけませんよ！嫌いな奴を突き放し、オチンチンを蹴っとばすように、そうそう！よくできたこと！それでいいんです！さすが庄ちゃん！山から下りたらお子様ランチ御馳走してあげますよ」だって……。私ってなんて優しくなってしまったんだろう。

ここで私はつまらないことを思い出した。あれは恋ノ岐川だっけか。『岩魚だって処女のままで死ぬのはかわいそう』という看板があったっけ。これは小さい岩魚を取ってはいけません、という意味なのだが、ましてやうちの庄ちゃんを童貞のまま死なせる訳にはいきません。しっかり技術を覚えてもらわなければなりません。

結局足拍子まで2時間もかからず行ってしまった。足拍子山からは南尾根を下る。ジャンクションから右のトレール



足拍子山頂上
風邪のためティッシュペーパーを
一箱持ってきた本図

を進むと車の前にひょっこりとびだす。

佐藤には悪いけど、俺登っちゃったよ。もうここに来る予定はないよ。そうだ！お土産をたくさん買って行ってあげよう・・・俺って本当に優しいんだなあ・・・と思いつつ熱のでた体に座墊をぶっこんで車に乗り込む本図でありました。

車 6:10 - 荒沢山 8:20~8:35 - 足拍子山 10:00~10:20 - 車 11:30

(本図 記)



カタクリ

《友好山岳団体の月報、会報紹介》

今号より毎月いただいております友好団体の月報と会報を紹介いたします。

(友好団体の皆様ありがとうございました)

月 報

◎Rohman NO.93 1993.1 浦和浪漫山岳会

越後沢尾根冬期初登 八海山生金尾根ほか

◎Rohman NO.94 1993.2 浦和浪漫山岳会

奥秩父笛吹川東沢鶏冠谷右俣 筑波山 万太郎山スキー ハヶ岳旭岳東稜ほか

◎Rohman NO.95 1993.3 浦和浪漫山岳会

蔵王OB山スキー 巻機山 川内木六山 奥志賀～野沢温泉 上州武尊山ほか

◎月報・ZAC NO.137 グループ・ゼフィルス

妙高赤倉周辺 八幡平周辺 北ハヶ岳 安達太良山 四阿山ほか

◎月報・ZAC NO.138 グループ・ゼフィルス

足尾山～加波山 尾瀬 白神山地 赤面山 上州武尊山 日光前白根山ほか

◎月報・ZAC NO.139 グループ・ゼフィルス

奥利根源流部スキー横断 会津駒ヶ岳 会越御神楽岳 北ア小遠見山ほか

◎わらじ NO443 1993.2 わらじの仲間

冬山合宿 越後三山縦走 吾策新道ラッセル訓練ほか

◎わらじ NO444 1993.3 わらじの仲間

戸隠本院岳ダイレクト尾根 戸隠P・IV稜 ハヶ岳阿弥陀岳北西稜ほか

会 報

◎歌集・酔虎伝 遊行同人「梁山泊」

山の歌191歌が網羅されている歌集

◎すずらん13号 鈴蘭山の会

山スキーの部として 吾妻連峰 船形山 栗駒山 守門岳 立山 白馬鍾ヶ岳ほか

沢登りの部として 上州武尊山川場谷 北ア黒部源流 北又谷 白神追良瀬川ほか

その他 谷川岳一の倉沢南稜 飯豊縦走ほか

◎年報わらじ 15号 わらじの仲間

沢、岩、雪稜、山スキーなど記録多数 海外の山としてインドヒマラヤのヌン

◎わらじ追悼号 わらじの仲間

谷川岳一の倉沢烏帽子奥壁ダイレクトで逝った鈴木雅士氏と町野裕之氏の追悼号

※ 編集後記

この度、会員の高田暢年君と原田眞由美さんがめでたく婚約いたしました。結婚式は5月15日だそうです、この会報が出るころはすでに結婚式も終わっていることとおもいます。ACC-Jの頃は会員同士のカップルが何組かできましたがACC-J茨城として独立してからは初めてのことです。どうぞ末永く幸せで過ごされますよう会員一同心からお祈り申し上げます。

ところで当会は結婚相談所でもなく、山以外の個人に関するプライバシーはノータッチのクラブであります、当クラブには眞由美ちゃん以外にもかわゆい娘が何人もおりますよ。独身男性の諸君、少し頑張ってみてはいかがかな？・・・・

(音菜台州記)



季報「R&V」第8号 発行1993年 冬

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城

〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
